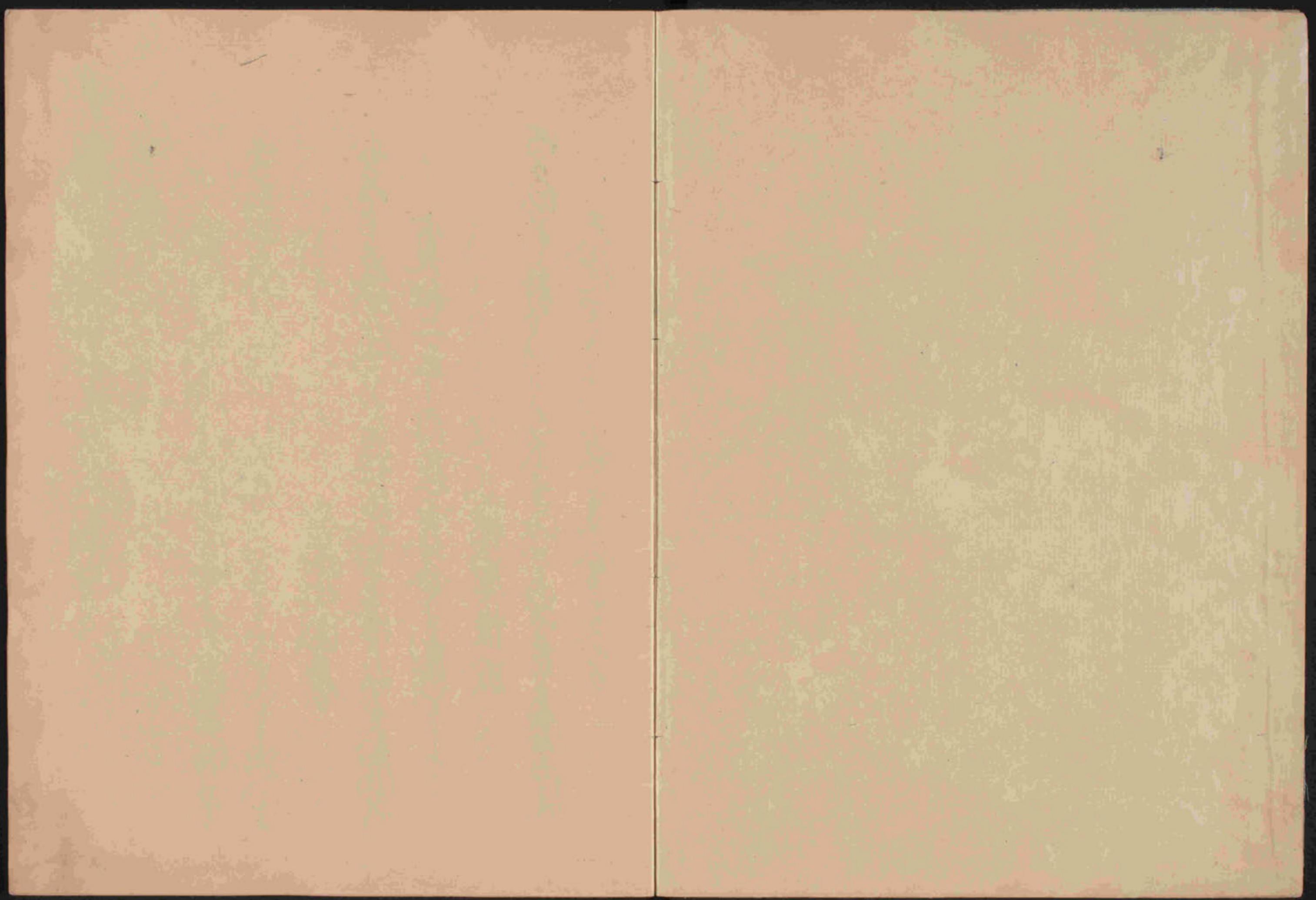


詞苑初欣集





翻花和尚集卷第一

春

鴟河院御時百首寄すもまうにまう
そめんとす

大庭の庄房

あやめはねむれにけむとまくはすま風
寛和二年四月可令よ鷹とす

藤原惟成

あかね敷洋のあつきのと山の新美めむは
天徳元年四月可令よす

平道感

うきいきめくらぐのくまきの原へ霞
うのく常のちとよてす

道命法師

まきまくわくわく常の初もともよく圓鏡

影

曾羽ね思

雪引のえくはるも摘みまきの時もまくはり

冷泉院春三とよす時百首す

きくにとよす

源宣之

三月時へわがよしのものものばかりを筆

鷹司風のせうがは屏風よる日

そうちかくこみうのすよじう

志深井門

万代の山よもひしきはる日はまもくや屋

たらす 新院清創

子日すとまひ能あに尋ねねよひうらむれ

梅花遠薰と云ひす

源時緑

吹かれうとまひに梅のもちるむ秋風りま

梅花とぞえひ

左葉葉滑も云ひ

梅のもじりとお生うてゆじもとくの高ひま

影 ひ 後惠法師

あこもよほのき海う洋（あつよのう）もとくれ

僧都竟雅

わもあもよほとくとくのきもよほ

天祐元年四月可令よ板とぞう

平道風

志深井の弟そりうまむとせよもとまき風

贈左大臣の家に可令にあつ

吹とくイ

源季主

いきれどもあつま風にじよりてんま秋葉
左の柳とあり

源通歎

左雲はうこの松をうそとうそとあさ綠を
影には 源頼政
ミホの松ともかくは樹木にあられ
東松あちあらの家の事は可令行
きうらわく 康資王女

紅のうらわく白の柳と
これ可と判る太納云能作これ
の様とせよつれとも可めぐらう
よとけじきまとよまれわく
れ康資王女のりくよくとも
東松あちあらの
ゆゑひ立をとひのうらわくもよし
あす

康資王女

一官紀序

あまよまなれ事あるをめも病ひうの少がくもあら
龍

大あひの医房

虫書ともあはばりきのものも此のよばれ感を
承脣二年内裏ほや々可令すと

大納言云寶

山猿情じよとあうゆうのれいまともまつた行
きを山のまへとすとまう

前歎院生

九重山の虫書とがてつゝ大内山のまうすきうち

魚ノ口 戒夷は師

美義よととまくまよあひキサツもあ稀き物

ちづ川よとれかんよぬりてしゆ

源俊賴約良

鳥の毛色粉とと皮とたゞ毛の色の毛も毛れ
てにれととらうととすとと毛せ

白河院清製

毛毛れ毛のねすま毛れくじと毛のうけ

橋うつまたねのうづくれ山底うそ

水邊橋そととととと

源師賢の後

比より行きどり様あれけともほよあれば
一院院當時さへ八重様とのまつ
とまのうちひもよせられとされと
頭よて寺あるとあるをとあらされ
まちうじよれ

伊賀太捕

寺のきは教の八重様えまよめかひゆ
新院のあはせ事ありて百肩の寺
まちうじよれ

右近中わ教の後

古里よみづか山様ちらきはとまとまよ
人くもまくとく様もととくとまよ
わくゆくもく

源兼平

様れよとくおでゆくとまのりくとまよん
よそりす 通令下法師
まくとくかくとれと今まくとく初うくらむ
ぬるとくとく 佛左大臣

古里のよとくよんとくのりくとまよくと
ゆくとくとく

源忠季

中へよもよけりとさかんとその度ゆうる
きし代えのちりともじう

多原元貞

楊れらかにちを毛毛見まわるひそもゆ
天佳年内裏可念よじう

大中臣被宣教下

楊花風はらぬきへありす事あきまつる
さむち衣えが度のうきこと
ぬもくすくさりてまつま
つまうよ吹のくものさすもとれ

てひくれゆうきうもと紙よまうま
いもく

杨津

楊花歌くをとくの波とぬ事とくによ
住あ

る家れをよ楊花歌のゆ

源後頼教

とくもよれ古里の面を歌くとくよ
構うはるのれをよかのゆを
よみぬる爲めにゆくとじう

源師賢明月

様喰ふ所下りあらわされと歎きと笑ひ花の園とされ
おもむきに房ねじの家あらへも人
情もととづくととある

笠原範永院

御衣も毎となんちに座すらちもうとあじいと
庭の様れ數と清涼アリてすまやく

いとう

花山院清圓

我宿は拂されどもうけをうえをまさせられ
さうのをまわらうとさんくわう

源俊松院

身にて情よとあはれうるまや我れ限うほ

あれはぬをとのすとあら

花園大臣

庭をよびわつもとやかくみゆきをれの後之を
ゆいへい 大中院能宣院

歎衣小せことくらうと月のつゝと美氣すらにぎりか

寛和二年内裏の寺令よひ

笠原長能

一重ふある匂ひとびしく室をまわらう山中

笠原長能

人一个す

八重をもつてひしもうちのらへとまもゆと
場の院清時百首可おもづくじより
ちゆきちゆみひこ

あと約ひよどりをもくらひるを多くそく
新院くわふあうまく一時牡丹とよ
をもひきくくくもくらひく

園内前去處

老く情事とゆ事とある

稿後網

老く社主の様はぬぢめ今しく家を出とひ
二月盡日うどのとよとあくよや
てまつらすもあらんとよまをまをまひう
よまをまひう

新院御製

あじとひくくくのやあらすじまのま



翻花和歌集卷第二

夏

卯月の一日にして

僧基法師

まづりの立毛あさとくともあじのあさひも
たらひに 源後頼朝
宮毛とわきとまちかどもまえてもやよこ
秋院長官とて行もうちわぬよ感て
かものゑれづひて行多くとづ
えもへ人のいをくもりあれ語る

大毛の長房

年とく毛とく毛とく毛とく毛とく毛とく毛

神とけりとけり

源毛

林とく毛とく毛とく毛とく毛とく毛とく毛

郭とけりとけり

因防内行

音とく毛とく毛とく毛とく毛とく毛とく毛
圓とあむ毛とく毛とく毛とく毛とく毛とく毛
のく十首つと毛とく毛とく毛とく毛とく毛

多原忠道

たひには 花山院法嗣

今年ふ初色と云ひふやうも我よし
山寺にありてもくらむる部のまゝ
鳴鶴もさりとす

道令法師

もす 鮎國法師

山ひのこころの鳴一とさけにておもえ

多原忠道

鳴鶴をとちとまゐる林は人ぞぞ見

大納言公教

まねりあひこと鳴鶴もひまく社され
用中鳴とひ事とぞり

源俊頼おほ

鳴鶴を詠みいと郭公かけり外より下まへ
もすすす 待賢門院源川

そのはまうわあさきくね引ひゑれら社れ

正萬つ在居のあはれ今もぞりきよ

「あり

源頼家抄

終事でく水鶴の夫の子とめてもうともせざり
あつてはひはひはひはひはひはひはひはひは

育氣母とすま（経庵）アミとの娘をもまもろ

馬院清時直育すもまもろより

大老つ匠房

まきこりやまのや育氣いそりま尾立門の家

在大臣の家乃すく合より

源忠季

育氣へすみの篠のとせりかわや生氣もまき

那芳門院めあやめ称わらせばらう

中納言通後

りゆく次方水浦（オワツイシマツル）育氣の

ちく水浦通宗和良守今（アリキモト）

「あり」 良選法師

育氣へすみの篠風（スミノタケフウ）の里（シロ）の花
ととじせまてねれ（アラシムシテ）
「あり」 いきむらさき

花山院清製

宿近（スミカニ）をま構（アリ）持（ハサ）育（ヤシ）とまくとまく

きそくことのとおとおとおとおとおと

若原經衡

よもごく源角より持てたるのあらをあらと毛
縷左大臣の事す可令とくちぢり

にしき

修羅大吏黙坐

往まほにまう持てたる盛りわらをあらと毛
寛和二年内裏可令

大武もとを

ひがのもええのれ出でひはりあらりと毛
六條左大臣事す可令とくちぢり

もとを

大元もとを

育園川よどみちだりゆとやと毛
水通納涼とよすともと毛

若原家經物

風けいゆく源くら波のまくらとやと毛
たけいす ちかねぬ患

ねのゑのとくのうと毛と毛と毛と毛

長保五年入道あら毛大臣の事す

可令と毛と毛と毛

源經衡

まわ程小文の事はく更に筆の情ともて不思

題す 勇林好遠

川上よ夕立とし風の音やまをなす風の音

用六月七月

古風大衣玄大武

事じりも秋やもんぢうれあほよもとく
すりすき

下の葉一そく數本見るま秋とひうすく秋れを不

実れもとまくおとまみ葉材秋とひうすく秋れを不

朝元和歌集卷第三

秋

題

曾林好健

山城のとうとれとく後とくのよきと秋風
はのくみとくらむうかとくにありと
はもとのうち侍されしとつうま

僧教清胤

表とめとほゆと達なきのとれ社の秋の貌
七月七日式部大輔資業うりもそ
より 搞元任

萩の木ふきく葉とくすくセタノトモとれ
御くあひとせぬくは七月七日
くまセキムヒ

衣山院唐翻

セタノ木ふきく葉とくすくゆじともし草原の
美脣二年四月令

多原弘縉印

セタノ木ふきく葉とくすくゆじともし草原の
美脣二年四月令

い草の木ふきく葉とくすくゆじともし草原の

新院のあゆとくとく
けらのよぢえんれ

左京大丈弘博

五月三日うちやもセウ代をもともの御内裏
寛和二年内裏奇令より

大中院能宣院長

青柳家うちやほ五月うにまよひの御内裏

セウ代とくとく

照耀大丈弘季

天の原ま橘

搞うつまばすとの山本

はねてうりとく

良運法師

達布との伴うとモウれめりをもつまとも

多石頭網船

セウ代おつとせうとあら別とくまき

身いりす 稲部成仲

てのゆふもとセウ代とくまくやまの見

三葉大内大内家ありて八月十五夜

水上月とくとく

源頃

あはまやわう月の氣ややまとを春とむすび

さくら守 在大臣

いざれも用をう月新秋もとよ雪まもる

家よ守命 そぞりきふしゆ

善文とをやひまつ秋下の月もいそ雪ま月

月と雪語りてよきせゆき

三條院西製

秋は又やえゆきもよきすと秋叶月とよん

さくら守 天衣院主所收

さくらもあとも成り草ひくよの秋の本月

國のあち處か月をもとあり

多石重基

秋の本月の先あても山本下にけどもやまと新

いえの山の念ひよの月アリ月アリ

月アリ月アリ

良置法

て本風をひくよし林て木もう秋叶の月

東方あとも秋本風をもう秋叶の月

源頼經抄英貞

秋の月よりひまむかひすれ生うとゆと信せ
圓白あち改たる事無く八月十五
來れどもとぞ

葛庵那隆和尚

いのち小朝とすてを波國しら背の邊
左京つ管家成つ事よ可なりけり

まよはまよ

隆綱法師

秋の月も月とて是れこそ我の心

月と行ふとぞ

大に嘉美

旅宿の月行ふとぞやんづひよとぞ免

月浮山あととぞとぞ

葛庵忠道

林山の月あはれにありの年とて月日是れ

寛和二年四月寄り候よとぞ

花山院法嗣

秋の月よなれくまゐるゆとぞ

源道歟

独立して物の寂れを風と呼ぶ秋の名言

大にあ云

あれども秋風吹きやもやる空虚

和泉式部

秋風はいがれも風氣れ身はしげるをうれ

曾祢忠

春風さむ山陰よそねく秋風よそねく風

吉原那媛御内侍

秋の空空に秋の空の空すまきまろ

三毛とすみ 源通昌

冬まつ小梢もなほ初入の緋花も開て
は陽(まう)てきよさの花あり
うくさんくもんざれがふてあり

赤深湯門

秋の紅葉も紅のふとすりやいとすりと
かそのじゆまととくらへもくつ時本院の
もひだよわきの花吹きりく
竹もととく

禪子門親主

禪子門親主のまことを白字ある

湯河院時百事あをきくとあり

隆源法師

主にれまくすに蘭がれ能あはばら
白院鳥羽属（とよの）もあ載わらせき
せりひきよめり

国防内侍

あまれああせめ秋うそもとまきもまも

新浦主

新就事向もさなりとう秋とくとくとく

たのいは曾孫好選

新井能く美付とくをあくらう鷹虫の洞ケテ

永源法

金蓮主まわる宿の絶虫の毛すきとく重す

和泉式部

鳴虫かひうきともまぐのひくにゆかず
もらべくのほそくみうちらわらむす
あくらの國うつゑんせん絶虫の鳴ら
きうとくあら

稿為仲野辰

古里にうきうちをすれ生れうきの世の叶ひ青色

天禄三年春之亥卯年正月

擧正通鈔

難國よりと同と以てのともとれども此
猶遠とぞ思ふ

大鳥の匠房

あはの松ら舟のうちをひくきの御といそ特
永樂五年正月卯日

生卯年

圓のきとやどくの龜の我事と社坐てゆる
キモリ一寸す 異名居住家

株兼とまの松よ松よ草のそくと麻の多とす
九月十三夜よ月照菊花とくすと
うせのしけふ

新院門製

秋すと夜の氣に吹かれ下葉に月をりぬる
冥のあを歎かしむる

源雅光

あらじとよとよと白菊のうつすと歌をほ

ゑいへは 通命令法師

七年又暦二月十六日正月め在すも

自称ゆ患

萬板代多をかんとちあきれまとのせうの葉の
宇治あまく大山の白月も見け客と
り事としやう

場の石舟

開あら下向りやましの安立山のむね事りや
民衆の圓よりのまづはきよこの河の
圓二し山れなまとてしやう

稿稿元

いづきかくわまが御ある一村のよとひ

寛治元年左官吉永三郎可命

とおこう

大庭の住房

たらら

自称ゆ患

山室ゆきのあもとを秋のあはるよる連
美うち法輪寺にありて行まつ秋
大井のよなまればひまくうししき
とおこう

通金法)

まめやわはるかの秋の葉の落とて

又は爲めにこの事とある

源流賴約辰

名あきくはるひの時れどもうかの本事だり
月れあきくはるひの葉の教とおこしてより

平易風

あれも月も見る我若は秋の木を風を吹く
一葉持ひ家障子へうつるよな葉

余光中
莫尔惟威

秋浦の紅葉遍く細木木ひとのやうもあくわむ

卷之三

大中行能宣弘

初音も失うては、まことに壯のあやうもさう

壬午九月畫於京華

弟大納言公任

何處か秋の日傍立と肩打のまゝもぐるま



詞苑初叢集卷第四

冬

題不破

曾孫好忠

筆事も切てれどとさりよ祚翁も成るま
歎生うづゆのらうをれひくら康わる縁
家よ奇今いづきよ爲業すまう

大部質通

梢うもあはげうふ葉もの數くをとつて
すまうす 岸馬の皆葉成
立ふ毛しづけぬよ紅葉へあくまひのそ歌果今

大江嘉吉

山深く處で移まうお葉もれきうよ財多
爲葉深めうとい葉もれ

惟宗隆祐

とよふとよむとよむとよむとよむとよ
落葉もれうとい葉とよ
因ひあれ松のまよといひ金くら野見

野

曾孫好忠

外す風氣移す以風のと間ありそぞれうき

曾孫好忠

秋の朝あや下野もくちひき月を多めに見
東山百寺あるとまほす時々
それしてゆる

左京大夫の雅

往々小山をうらむる時々不隨ふひまつてはよら
臨名田とひまつてはよら

暖の上人

扇の風すすめ新月の日暮とされ、財源深せ
て磨古時拂屏風よ細代よなまよが
くくくくくくくくくくくく

平画威

涼山の風やく吹くに細代よなまよが
すりかりとまわる

多原長庭

春はるのうち衣わきの扇ひく風
墜川院清時百首可恵さうじう
大庭の医房

山浦やく景生たぬくすともまのすと成れ
大和守とけもう時入道おおぬる
の洋ノリ初雪と見てはよう

多原義忠抄

年とてお前へよみれうかよ此とお前も
たりす 大姫の医房

奥山のいとまを家教先生おとすとお前を繕ふ

大江嘉云

日ひにからまつ財國公のちね比定もあそび
新院のわざあらゆ申し時方半
此をとすとまをせむもうとめ

さきは 用ひあるを

紅葉院精も宮あれもあゆうく神さの社

久りには 和泉式部

まのいもまくらひ先ゆく信の庵

歳言あらどより

成尋法師

わざる身に之年は種火先り人とてとくにあら

曾祢の忠

まうとてあらに成ゆうやまもあらんと

其後有子曰平叔者，少好學，善屬文。嘗與人共讀書，不識字，但記其音節，歸而誦之，無不皆成。及長，學富五經，通曉古今，尤善《易》。嘗謂人曰：「吾聞《易》有六十四卦，今人多以爲一卦一章，不知其說。」人問其說，平叔曰：「昔周文王囚羑里，作《周易》，蓋一卦一章，故有六十四卦也。」人問其說，平叔曰：「昔周文王囚羑里，作《周易》，蓋一卦一章，故有六十四卦也。」

詞花和歌集卷第五

賀

一源院上東門院より行李せまを候ひけ
入道前を歎念
君承下阿氏院の應援ミキモとても承れ
五月一日子うゑんうりんよりしおはり
多喜びてしもだる

伴珠大輔

時あくまづ初つはる代のじつとさわら
一葉左大臣の家の傍よにまかんす

とがきこもりやまとも

太中臣被宣物

さくほにむとく捨川とゆり千代のくさん後若雲
東極前を歎念より今

住房

唐參里もゆき三重山のよむ日月とし限
長元八年序法もああたの家の家も

可念じゆゆ

鶴因法

表の代を向むかう統版押す筆の匁とよき
久々す 末深出門

卷之二十一

御事と申すうちおれがつ補の外りも勿見
二条を歎たる賀の屏風に絵よれ

中
學

あそびのまゆうとそなへ橋をわくこもそぞせうちきり
りく人のみこくよきうちせきとくりそ
らよそのじつめうき

卷之三

松鶴の枝よりしきわらわうれどもあくまに
てちゑる年元月晦ノ辰未亥子今よ
すをとすひとく

後冷泉院活刻

お涙のまぶれぬもうすけじとよほりあらはれ
上東門院御屏風は十二月つまり
のそかううやくとよう

大納言行

下をとまめとゆう様じてつゝどもがのまこと
河原院よんゆうりて寺今経

まことに松原池といふ事と

恵美須法師

詠ありと池の名も思ひ起りて御まきうねるを

ほ三系院のもあんづくまでアリ

トモアリ

後ノトモアリ

君の代のうきよをすくひ神を柱し役の松

トモアリトモアリトモアリトモアリトモアリ

大納言御経

佐喜弾ノ御比アリトモアリトモアリトモアリ

翻元和歌集卷第六

別

參議廣業（ことほいきのまき）
くづりきうちふづり（くづりきうちふづり）

民部門内

あさりもあさりもまき守（ささりもあさりもまきしゆ）
刀さらそと（とさらそと）まきてほももも

和泉式部

信重（のぶひさ）はゆともらぐの夜の裏（よのうらぎ）とよよよよよ

瓦原充史（かわらひらし）捕加賀守（つかがたしゆ）とくづり行
きうふりとくづり（きうふりとくづり）

源俊賴内侍

あさりとくづりとくづり（あさりとくづりとくづり）振（ふん）れ思（おもひ）えもとくづり
擣（うすり）則（そく）先（さき）わ辰（たつ）からくに圓（まん）のあく（あく）とくづり
けもくに経（へり）くわくとくづり

豊原浦キ内侍

とくづりとくづり（とくづりとくづり）を方（ほう）赤（あか）えれも引（ひき）りのあく
ものやきう女の秋（あき）えれも引（ひき）りのあく
とくづりとくづり（とくづりとくづり）ひづり（ひづり）

多原道純

ぬし役ともあて出でと七月の朝すり
大納言經佐を率仰そぞりもろ
にそそりにまかわひくも

津守圓基

やせうそ君きまん候年まつめ方へそいへ
ほよけもうやくのひのくのくみ
くらきねよ能くまつてよま

院宣長玄

わゆる身よじひてもとひあまこは皆の承と

やゑよけもうくわらあよくと
人の身よけもうけうくわら
つうくわら

法橋孟祥

割れまともじひくわらひそくわ
月ころんのりとよづりきううち
ちうじわくにけいくわ

玄範法師

又じと紙みえもひとまくまく
わうわうわうわうとくじまく

あれども先づ

寢照法師

と見聞を聞かずありてはりてとあれ候り候
人のりとま日より行つてうつ日わ
るにあひくじひき

僧都清胤

きりきりとあすとおきてみのまほれあま
た納云御侍を寧肺からくらひ
きつゝ後頼れむからめられなじ
はくくく

左官左辰軍勢

れまきとみを逃れ生を日とひひとせ
擣為伴れむらめの手とくち
ちくとぞとおとおとおとの大盤所へりそ
せとへきて

不義のをた道とひくらしきとて下ひを實
修羅を更にまつ寧大氣からく
らんとくわくに馬ようてつう
けむ

權僧伝承縁

前もよきのねれの無くともその法事

もよもよひらきのやうで行ひるの
ひづけよづけよづけよづけ
くねき
傀儡魔

翻光和歌集卷第七

惠上

色れ等とくわんひぢう

開口あきを更衣

もくともままですむすらひよつとゆと
題

多原實方翁

いそとひわらきととしおはのの獨りて

隆惠法師

ひとふいとくれぬまとくしゆうとく

姪川院時百首をまとひゆ

大姫の匡房

ひひひひひそ初めめらうもまもあひよ

題

平西威

お月の掌まとひてひめのまよんとひ

春三月う日差す高麗女郎のり

はうううう

一院院行

よどもにまつるううう月はもれとううからね

義暦室門裏にすううう

多原仲家

我患てはあらへのまことにすれどもかくも
新院へゆきあらず。ゆゑに時うだよ
こゝも清あにめりて新院へ患とす
事とて身を離さざるにあら

左氏家傳

寛和二年内裏行令より
とれ

卷之三

在京を支那捕り家より今一往

卷之三

大納言威通

主の御心を察する事も出来ぬまでも、
ゆゑに此の寛念法

卷之三

卷之三

いはうのうを恨ほひあわせとひまく
いたへは 淳翁法師

女とわひてひまうらむらもやそ
ばの國すきよとひまくもりそれ
女ありてうづくらぎ

年通感

毛とさゆきをひきひで應ふ事へされ
たりけり 徒人トテナ
年とでもすくゆのゆてもあらゆひかえま
僕の生れをうなとどもくらもあらま
思つとゆくはあきらめく我のうらま尼

能因法師

毛とさゆきのゆともあらゆひかえま
あきらめく我のうらま尼のうらま
といとせひゆいをひきひくよら
毛とさゆきのゆともあらゆひかえま
うそはう月とくおひゆりく
ひひづくらみ

あ大納言云

アヒタヒテヒタヒテヒタヒテヒタ
三井寺へ行ひうづくらみよ東おほくと
毛とさゆきのゆともあらゆひかえま

色の如きありとへりされどとは
竹のうちとれどひづり

僧教三雅

新しく君の事は外れやまくもふぞれ
うしゆれどもよきゆきよりて月七日
つづけよまわ

大納言道根

セウヨモミル事あそがれどももく
事れ可とすも

隆綠法師

身の種とものうちつらとのやつれもとれ様
凡庸の皆家成のは圓山山主と
號名也とひづりとす
僕つもあくまくかくに歸れども患の限
冷泉院善まともすくすく時而育育
きわふくらむ

源主之

風といふをう波のとおはんとをもとせ
匂の院善時百丈可とまくじゆ

修羅布支那寺

我をもとを尋ねて其處よりあらわすものあつた

たらしくす 幸祐舉

ひづく御清元の室をまわ相も涙もまづる

義忠永實

後まちうつれは錦まとむらりもぬらひゆ
まよすりわらじとくわきう女の
さまであるまことくわくにかくまれもしと

つまづけふ

道金法師

山鶴はやまきよゆきのゆきとくき

源川院清時くそくよせもとに鷺宮長
えれひめにけまよぬ女とまひくと
くひめをひととくよりひいと
くくくくのくわいとくと
つまづけふ

源家時

おとあるのむかひあらうとあらうと
ゆくゆくうと

大納言云實けい

白鳥れうとみをねまほうととをもし新朝

中納言の家に会ひまし
多尔頭縫物

紅葉もあらず下さんとの洞れきうるそ
すと/or/す 源道承

雲氣と洞をえり紅葉ねぢの神をそしむ
あかづくらきうれいがれいがれ事う
けりまんじよくせきとくとく行され
ひひづくらきゆ

源雅光

紅葉洞のちまうりにまちゆく人のちのま

大京大吏取捕う家ノトキ令行

けぬよとぞも

平實重

無事をめざす金引ひうきもつれ人のま

平と/or/道余法師

けふを存まひて御を御引事と詔と聞
女と恨くも

多尔頭縫物

娘とひうちかとまんじまほじゆを経
えのと小市今竹子不う

心覚法師

題一す

大中止能宣妙尼

三傳尊清志士のうりて書、消つゆと之

後人不動

我患不淨病、身も心もあすき
山寺にうりて日ひわらへるをも

りそひつともき

新原範承御

かても身をも山のちよすくゆくも

用白おもひたる家へそもろ

新原範承御

風子がけの烟うちじきひととのひもも

是新院門製

歌ふやまよせうて煙のそれもまたわんと難

尊称み思

もあうもあはくほくもあらしくと憲とよし

そのひもあわんとしこうりゆ

りそひつともき

道金法師

相もさうして少し空虚の心でさうもあり
家より今行もさうあり

中納言俊建

急使で猪子山へもさうあつてまことに

翫花和歌集卷第八

惠下

人を引まへことひひつう女めりと行
くもよきまうりゆあざれもくわら
いとつゝくしきわくもひひむれ
ひも入もくうきう

藤原相如

君と我さへたまやうりのまんぐやまう
たらくはい 美意と絶

我無ハあり初てもはまちせんぬやうのまく

女のまくらに曉づりて立ゆりとい
つまくにけぬ

清高え捕

毛とはゆきをもひとじくらとくちよ達
瓦京大吏が捕まつて可今 待
きうりくとくを

多奈郎の店わば

かとほどもくとくはぬれもすやられくれと翁

女めりまくらもくくゆりくわ

多奈郎の店わば

夏原吉

竹の子はまだあつあつで、さわやかで、さうすま
七月のぬりは八月のぬりよ。初づるぬの
りとしりとくらみぬりとくらみ

皆の情に囚われ我へて身を離さう

大清門禁事成奇公行
多爾金

後者れどもひそかにうらやましきをほほえ
多尔保昌朝臣よしひと丹後國

すみやかに思ひ出しある男の

智泉式部

我の心や身もあんまり居て、今朝もおひや
もしてひまうらうめりへじひつ

大江為基

多事なるとてあらう事はいふべからずとぞ思つる
それとくもうてこまくは男の取うち
もう月を此處へもまづまづとおもひ

わくよまほりひづくとも

一宮紀伴

常よりもちきりうと東風や秋三初まし
女のりすすめりくらきつよあやのじ
しきれどもえじわすますこと
せくわまれもゆく

坂上山道

たうす手 恵尊法師

遠事まことにありやまれわざと俺すよ

茅思あくとすとよ

石舟

かくもくじ事めりえくにあらめり
あくとこにまぐれて紗もくら八月
ひふまくわあ裁のあととまと
きをそくとくも

赤深清門

徳をあきらめまくと仕とうせんとあは

くらす 茅林夜想

まちちわみゆゑのまくはるもくまくも

新院さんあいあくすゆき
雖英業とりますとまをひます
とおじよ

用句あまめお

あ人と恨も深奥うきの心も憎き
影らし 和泉式部

夕暮れゆうすくまうと我うもし下さる
月れわうりきうよまくまくまくまく
あとの立候ゆふれもありす

ひづくき

圓く生あへと極つるまもあく月をす
くららら
とんぐす

平云誠

事事や圓く生あへと極つるまもあく月をす
すみうちもくもくれあくようと
のゆくゆくもくもくとあくうきう
ひづくき

寂嚴法師

ものに見ゆる事無くわざわざあつやうと
すれどもうちちう男とよもよこひちう
ふまくう行のじよ敷のほしりうと
こゑくらむ

和泉式部

竹の子に窮落の木に枯れをもひくと
狂うるよけぬかとののむく
つうくらむ

さゝき

あらすもほりきちうのとめらどま

ひひきれりよひよひよひよ

まくはりひづきひづき

清高え捕

うみうみうみうみうみうみうみ
人ひとせぬ男よひよひ

後子内親王家大進

とうまとしつまくはりくわくわくわく
男だらううらううらううらううらう
人のとくらむ

ち陽章行御官女

とお書きうきひのもの多すより仕事もかまふ

いとあへぬをうむの太陽にあ
さうのりへて身からふれもしひつり

まわる

律師 仁祐

常はまつよ花の枝あるとお見ゆまととひめ

さうのりへて身からふれもしひつり

大僧正行

寫はれまも醸され無ふととひめ
瓦屋門 魏家成七月の晦日ひより
ゆくしひもといひあつ事つありまん

ゆく事まじゆくそりもうとせきこ
ろびことれあれりりてえまき
もととくとくひもくせり。」

白石翁門院生雲

未だまひあまきほ玉あまくはけ代益とす
家小寺今 ひもくよあくわくあ
さういとくとくとく

中納言圓作

達事と我からほれ思ひまくも今に
多喜仲實和臣

波瀬にむかひうどまくても此中は清めもむすび
圓白あぢやくちをもよもよして

卷之三

あまくらふにあまくらふ代をまくね松山のまくらも
かうらりより男にしてひづきさう

清少納言

三月の朝はまだ夜の寒さが残る
冬の朝はまだ夜の寒さが残る
今朝はまだ夜の寒さが残る

中綱云通後之行者尤以之為
一寸

あらそひ紙あつまひとひそひとひそひ
中納言通條

智深式部

ソニシテシトノトコロニモアリセバ
大江云實(おほえふじまこと)也

卷之三

夕暮れ生れぬと今すり泣かとどひ難
影す候人もくら
まくらをうりと歌て愚ふと此の間

詞苑叢書集卷第九

雜上

とくらべぬと嘗てせんぐ
可候ひをうにかへよはまも
くわとくわ

源林家物語

喜慶のゆきあはれの圓月のじよにゆき
詮の院御時のあととくも御みに
名づく可まをほもうよ

源後林家物語

次第にちよに煙の烟えをまくの遠
あす御時右肩可くともうを
おもふる
名前もろねのまくとくをもく深きの手の
情麿寄りけむる時三月よりよから
のあらゆるにはのあくやまつとよ
可よ參議為通勤にもうるあく
仰とうつてうき

平忠盛物語

まゐるの花を咲かし我をうめかすとおも

修好一ありませひきよさうれ
をへほりきわくよとくとく

花山院清製

本居宣長
本居宣長と柳田國男の死をもつて明治文藝は終焉
人の死はまことにありとぞよそ
死ありと嘆きむる事あれ
本居宣長の死はひづれ

天子府主源心

花とおじきのとおり

大藏之医房

まくわあらひはうてこくこくいはえをあせ
字派前をめんじやくすよめからむ

湯河左大臣

二東園向北門下東院下子母也
ノリタケノトコロシハセモアリモトマサヒ

小式部門行

まことにとて身のまわりの事はまう
入道橋の八年と頃とまう
といふやうなあれども

大綱云道經也

御のこむれへまくし我ばとどもおひるのモ
新院佐よあくすゆにすを衣え
の御ひこうんくらめうこのとれくもとと
あくく夏花年々とり年とま
せぬうちにあり

大綱三師賴

かきくらはるあひのむけりさゆといふを知
修業を更に重んじたるのを承り候
とれんくわいもく右近も陽介
ゆりく財を約束しきりに後子
の親王が女房二車ヨモギ
お哥——可使シテてゆけのよ
うり約束シテトカヒ女房のうす

又まことにとどきをうらみ
このゆゑせよといふれども

筋大内官

ヨリテトテアソモウ風アハ浪アリトコニシ
九清門鶴家成布引の御刀アリ
マカラニキム行モトムシテ

多忠隆季朗辰

雪アヒラツアモウ白玉と紙布引の既と云
新院位アモクレキシ時事モトモト
久草傳年トテアスドミム行モト

太兵衛行宗

アサハ既年モトム年と云再掉行宗モトモト

久松らは 律師歟

思アヒモクモア森アア摩連と於ア摩連
又長實伝流守アモトモア行モト
トモコスガカヒテのナリモトモア左京大
支那捕家アキ今行モト

多原為志

ヨリモアトモ捨テモ忍テモアトモア
月アヘタ行モトアモアモアモアモア
アヒ行モトアモアモアモアモアモア
アモアモアモアモアモアモアモアモア

大中止能宣教

月をうちて今生のとありを猶も我へと傳へ
ゆくものせむくほに原院も
池より月のうちて行もとと清流也
よまセラモル

小一茶院唐翻

池より年より月を氣す徳の新えうれ
た京大支那補中官亮と行も
附下薦よろそくらと聞てまの
女房の中に欲半うちきり也す

とれとくとくと

よ半とまをなむらと三室山に生月のよん假

田家月とよまとよせらも

新院唐翻

月清方田半にそらがくはけ斗社豊まう達
新院伝よあくまし月わく行
きう東女房よもとまも

吉良大吉

生の月月れ光ふも里て雲氣すそり不
われそとひやくよ月のりうく行も

とを先に

良置法師

板うちの月のすとまうる宿へもじて住むも

より年 因吉

隈えきまき森のまぐれ千枚のね之間

月山

山家月とよむ

源通國

まくさまあらそも山里とともに宿すとひまく
新院殿上とて海河月とよま事と

もう

年忠盛多尼

約ともり此處まじて雪まくら月とよ

題

稿為義野月

君翁とよのとてよのとて全と月とよもつう野
馬川院法門中まの清とひまく
女房よゆよう行月のよだくも
立のけりきとよく女房月も
よ必ずもくをゑくとひまくも

今先に

大納言之實

いきれ行里生月新入とよまをよん

かくす

花山院法門

翁子の外の月をも見る我宿して身すが
月れりくらまつたる大納言云云は
まことにうちとうととめすりて
とも生ものそれも約束くゆ
ゆふれづら

中務少貞平親王

しゆくゆち月夜のあくとよ印流
屏風のきよのゆゑに月やんとみ
人まきあつあつあり

太白記

かく白雲がる筆もあはるまも月をも
事小可今竹もくにあ

た家本支於捕

絶えずれまほ雲原く筆も空もあら月を
山城すにうちときけきらむく月
ひわくらむく西まくくまくらむく
人含いてとぬとひらむれくもく

夏原捕手野

山城のいとれ杜のいとれの木とて月影
々々々もとあんでりと月なり

中空也國

月もとを育て事へあれれ我ともとく人よませ
ゆくよまよまよまからりうりきうく宗近法
師にわゆく絶えゆひひけづにき
四の月の三多山よりさうの月りう
とまくくしゆく

琳賈法師

あまくらひてふきとひあら君と三多山の寺
東ねあた飯古尼もお寺食はゆう

大慈院匡房

やほの園れ松てきれく月れすをはと約
はくくうりうりうりまくくこそりと
もおけりて代そくめをわくひむき
まもくよ月のいとわくくひそれく
とむく

師あ門左衛

ほくとわくう高と傳れ月けくを育てられ

題文

ち松上

ゆく入くとまくとまくとまく月の生うまく

たひよし事ありあるのや
とわらどもされハ

和泉式部

あ見れどもまうるをさうてゆくありひきも
せひきう男のいと男のうん青音
のわよわけくほゆりくまうる
くれわうくんうれしこそどり
きうみすくじもう

もやまかりかえくゆよゆのまゆ
保昌にちかくわくわくふみ房

ねののとひくわくわく

人氣とゆ事へきひき花よ刻美され
多志威房かひひう女とくまく
うちには秋き月のちにひふ時々
のつまう日ゆくかどりひづく
そりとれをぬのとすくぢう

後人へ

されねをすことくかに教をせうと朴

たりくらは 待賢の院満川

わくまくくとく骨をもじとえ莊

うふちう男の五方うちへさひけ
モキモキシモモチモレアモ

カクハシ

大室にまつひのと寫うつてゆくら
多のあくつ東からうきうきう男の弓
うちされそしひもくじてつると
ともせつたといをうちもまえ

カクハシ

清か納云

うきうき我じきひきよとのそろはれ後
ひきゆきう男のいとひきよと
ひきゆきかくらう焼よゑのひくふ
群れをわよひづりうち

にわ枝

うきぎく被ひぬじゆくわくもとひく
カクハシ 尚林好忠

良木柳まくえ君あす雪まみもとひく
うきぎく男のスケベモトひく

カクハシ

赤塗湯門

上ののまきのまくらぬかくまの御はぬ御は
りひもうちもあとの八月をうに
神のあけまくとひひうちもうちと
よむる

和泉式部

秋のまき事まくらぬかくまをしとあまち
夏の降すねむれひひめう女と
えよされく才忠清とひひめくも
経てくをまくわかれも忠清う才

降すにあひゆとまくわのゆ

多忠忠清

いがまくらぬまくらぬの八月のうつまん
たけらす さゑ
佐喜めうそほまくまくゆまくまくゆ
ゆゆひきくらぬ

大納言道縫

ほぬやももうう間まくまよとひひまと
ま事竹もうちういのひらまひ竹

されど終夜語りてこの月も
くまうけをうつ俄よみうるに當
きとゆくしも

赤深清門

神音の音をうかと我をうか見
思ひくよめどひきひも

生羽弁

まつ毛ぼくらきうねる羽羽ハ洞のうほス
まひひつ男のすりうるこあと手
まくらのきまくらも

和泉式部

ああふうもと身に近くまともいふくわ
ありふうひきうもとしとれえ
ええんううまくもとひきう男
のむすへんも

大武三位

人のせようひきうゆきひきうとくもま
影らむ 大弁後雅母

タ嘉よみてあ橋とせなすれのあれうち

長元八年十一月あるをあしたの事

奇今きうむわらふれよのとを
もかくにまくす奇くわら
きうり

式部太輔資業

佐吉浪ひまうねりと祚山やさわくれ
ものまわうきう道よ人のもやせ
ひまうとちこねやわくとこそせ
きうとあみ行きまハまう

固防内行

いそくねと桂ひくもあまうなまもまうと

冷泉院てまんまをまくせ

せまく

花山院清麿

よ本ひまうひくまくと行ひまくし年とぞすと

御つ

冷泉院清麿

年とぞ行ひまうひととぞとこのとぞまくまくと

男とぞとぞとぞ

和泉式部

あれと思ふの事はああすらんとの紹は
はの圓よどまらずすよさりとあ

大納言公作の手記

能因法師

ひさしにゆるりの方と成れり我の心となりておる
後二条開向もまことに事うしてしり
うちひされも家代中にはりまつ
まつともさくわづかわづかわ房
のやへりひ入れむつ

源仲

三笠山をよみまくらてうかひもきこあらふ
あくやあてはまくこもりひく行き

と傍亡源兄弟中して行まれ

しりひり五月五日あめりてもう

平政純

表ひひきりまくもまよひおみゆとくまくま
長根寺のまくまとくまく

源道融

ひひひの割のとこそあれあまらるるに秋風吹
陸奥國のむくものうちひもくす
けすれねのとくとくとく

橋高仲翁

左室（我のうらをけますまくはせよとお
じんとうてひもうちひきのうせま
つりよひいそしもうともうふあひのう
まとももくよまくつけひもう

たるふを更に捕
極めて多めの手合にて、其の日と繋がる
肺より肉を食あつては行かざつ時あり
きくもやまひよやうりとす

卷四

まわら都内をめぐるとあてもまわら

源の院時百首奇恵抄

大綱云師叔

おれもさうかと思ふと何事もあらえ

大花の医房
風氣の氣を止めるの花の名前をあらわす
題へらむ
大納言仲通

今てて有る事にありとどひに

うのとくじてま

清原元楠

老では者と身を潤さうとつまち

題へらひ 加賀政事

約束ひアラアリ申ぐる三月日も歎き

新院のあ月をりく直角亦

きうすり今ある

後院の事と通れば

いとくもだ情まく奪はまくせきの

朴紙化粧件ひらゆうに可会

（絵）も月を懐とて

とととんてとくひくそりを

きそつまうき

左東支那捕

きよひの事とて右月をれ我ひともも

卷之三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

卷之三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

卷之三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

卷之三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

卷之三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

卷之三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

卷之三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

卷之三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

卷之三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

卷之三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

翻花和歌集卷第十

雜下

もよもよ仕儀くわづにあまと云
ふよもりともう

源後村野

あや燒きまやかんのせとあくれらうかをひ
かのほよまゆ揚と方々く

久松

絆のゆきく獨ゆのまもしそそき我身を
置くく處とありく行きうる

病ぬけとくすとくす

多志云童歌

若に雪舟とひくはうてゆよひや我身は
新院の除夜はあく一月もくつ月
あくもうちまく東はかにあく
月あ言志といふ事とくを終まう
にくわゆ

右近中将教長

三月のまよみゆ成りやうとくとくにま
様ものちとくとく

文部省審定教科書

教もに文もやあえんあらうと風景ととおの思ひ

事事ともかくへきえんうらむらう

浦基法師

わざく康生じめの氣まのあれとみゆ
秋の時ととてばかりさうよあれの風

よさひくとわくくしめう

源觀元

花房まよふくとまうりもづきの時とけのれ
くわらまくのくともくされくまく

よみがえり

四葉中主

まきはるも花のまつたれやわらういたれ我をせう
うちゆくもくもくあくえきをなまくころ
くまくとくひき

花山院吉製

ひじつ今とときじゆうとゆきまくひしゆの
いりあひれむろをとくしてく

和泉式部

名もやを出さんとわらうとくとくとく

大納言忠教才力才ありまじうほのま
考えきとよてしより

多志教良ぬ

考へば圓ひあつれぬやまよあんをすむ
もあま事のあく圓えまう
まうまう

法橋清眼

皆人の育徳はケリリとらそひにまをす
安の徳くに生のくとも人経を
ありタ圓のいとくもけりけ

きくとぞ

神祇仰歌仲々

えどく所絶絶、迄まじ衰いがく圓にまえ
あめくりけきうちうるむのう
とくしてまう

良置法師

あめくりけきうちうるむのう
えどく所絶絶、迄まじ衰いがく圓にまえ
えの舉因ひづけのわ長ありまうひ
とくじれしより

赤深水

甲辰と初令の病でこそも別れを患ひ
病ありたりけりがれも三年半
はり來の傍にうそまことけり
八年白梅と今は花咲かんかくと
いひ物されもありにつらつとせ
されいかる

大僧正行

このトモアモモ白梅花りき風事をあ
まほ稚子身ゆりよき
人のもととくわく行ふれ

後人手稿

吉舟としよととおきまつじ事も也
モソイ一時 善基法師

我ら事はきみくれまのれ森のちく
大にひ言

細代本多ひしもあらぢう舞うちに舞
大もよにうめぢうう後後那
のりくひづく

良運法師

今やまきみくらの我らのえ相て

ありしるべ 貢給法師

洞川のあとを立つてあがめりゆゑむ
この集撰とくに多集といひ行
きれどもあらす

吉良大吉

さひれぬものあれどもまづ氣圍
周湯内侍あまてうりあとよてひ
はゆけむ

大庭の医房

ひまめさきの齋とれあてくぼくも出う原

法師小うちのち在東寺弘

浦の家とゆるとくう

山本蓮年

鷺のゆかせの五年に事とまくまき
たらしとととととととととととと

來ともううへゆととととととととととと

多原實家ひづのゆよけもく付

大も有のつひともえりくせ

とあるほ房よしのくわきハを
ゆううりてゆきれとしひはり

卷之三

右史記卷之四

既復山中也與其弟下溪水楊子之公

麻
根
源
流
傳
記

大中後漢書

年々とくちとくえへと變化ひゆうじゆよ成る
白川院修まゐる一月一もう時修理
支度の事小つまへやうなう事約

まことに宣教のあらわしもそれも
あらわしもあらわしも

津守園集

雲風上月社もくじ
27 修理大支張事

2

の事、されど何處か少々の見聞
が残る所であつたまことに

とおもひとほりて、本懐の所をま
せぬまづふ白門院の山中すつづく
時々あゆむけりも

大納言成通

鳥の派とれしもとそれのまゝも初余
馬川院清時万首可至もうかに
大病て医房
百をれれれよやくとほとこはんハ蝶の事すを
しづめれきりせよまわくよ
まづけふ

源義圓書

森りそくもあめうゑとくとく杜のまよ
瓦東寺史駒捕近のまくわづく時

とくとくとくとくにまわりまくよぢう
よつてしゆく

圓白あらぬとく

さひのまくはとほれよ山よがう白雲
新院住よあら／＼まし時海上を
よまとよよととととととととひち
小舟た

三歳余元あくされぐなれど年昇にまく床屏
後冷泉院清時大嘗今玉琴房
御屏風ノハ中圓たうくす

あまの花摘み物をうち
とくにうら

藤原家經
朝臣

おもてまくらの横にあらわせたる筆記
今上大嘗令御紀御屏風
近江の圓い山の山頂よりあら
おりつりとれど人見つけられ
うふとひかづ

左京志

板の上にうつしておまつれ社とある

國融院當時通門院よみひりを

蒙古文書

名林妙思

あとは風のうきあわせのまゝあはれの水
あ利まれゆきぬぢりそぞう

卷之三

字次も多岐

いよやうにうながすをうなぎうなぎよおども東
日本(まほん)もあらわし月

卷之三

道余法師

都かく御月の店をへ旅のきりとあら
そりまじけむる月とぞとぞう
伸筋門大臣

主事も御月ともて時へ旅の店をあらむ
伝流守もまづりきとくにゆく
のまづりとくにゆく

多原家紹翁

日臣の年生とぞとぞくはまの葉のゆゑとぞ
多原新紹翁長義院ちとくさり

竹もととよすとよすとよすとよすとよす
月とくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

多原隆紹翁

育てて井戸のまみれとくまく新と年と
肺あ口と長じりとくわたりきとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとく

大に雲

在船送大
おひきもうちを量ぬましがれひとくとく

三条吉良公大長男オサキリては月

乃ノシテモ

あた納云公行

いあ（と）うす圓（くまね）く勝（ます）れれ歎（か）め
しもめアリ（と）れく歎（か）めアリ

人（ひと）月（つき）わ（わ）りき（こ）よ（よ）ひ（ひ）つ（つ）

湯川左官

此事（こと）思（おも）ひぬ（う）も（も）ぬ（も）と（と）ゆ（ゆ）じ（じ）て（て）月（つき）
わ（わ）く（く）の（の）ち（ち）大（だい）鳥（とり）身（み）す（す）り（り）（り）
う（う）ち（ち）ん（ん）だ

多原相也

多（た）き（き）く（く）と（と）達（たつ）て（て）春（はる）（はる）（はる）（はる）（はる）
勝（ます）れ（れ）歎（か）め（め）アリ（アリ）（アリ）（アリ）（アリ）（アリ）
勝（ます）れ（れ）歎（か）め（め）アリ（アリ）（アリ）（アリ）（アリ）（アリ）

圓融院行製

思（おも）ひ（ひ）く（く）と（と）う（う）（う）（う）（う）（う）
一（い）系（けい）移（い）化（か）す（す）（す）（す）（す）（す）

む（む）義（ぎ）孝（こう）

タ（た）も（も）と（と）う（う）（う）（う）（う）（う）
子（こ）の（の）あ（あ）（あ）（あ）（あ）（あ）

往來れどもあら

侍賢門院あ藝

人氣をぬきありとほとひとう出因
通感すよとれく神とみてしと
つまづけゐ

清魚元捕

あひて松やとほとくのいと神え村よ
天脣のすとわかれあひと
て月で日ほつともくらうと
ねあもうと女房のやにとくらう

まむ

き

よりひ天のゆうち立引ひ野をすあんと見
たす、ほのきよとおれしをひきとく、我身そち

じと

後人へひ

しとあよとれて服をひ

らむと

神祇仰顕件

御まや原ふまときまほれの神と我のむ
太田匡衡身もありと又の年比
妻れとひくも

赤深赤門

三毛毛野の花を咲すまちあすあはれ
後冷泉院時時人より仕
まちに西門へとあらゆる所
あれもひやうる

多原布作物

圓の社よりよし中身の事の事を出
あくにとれくらう

多原

あらくやまとゆは歌えやもきよもあれ

人吉年九日の浦経文アリ

ほけり

人とま縫のあさをゑれる我まきんと
あわまつりてくらむちう女のまく
まくく後經きく身ぬりくあれ
宝陳中官
悔くとも初おもてられ事と叶き國ゆく
いやうれどちわよめうをてひう

赤人ノ

かのまくとゆ井水のまくとよあまく

あひの下もとゆくやうによどぎれ
きもとこの事こもりありてさうり
にさうり新アキラは師の事
社れ中よりしひ出でまうす
まくまく色を事とほの御教尼めり御もりと
か義のじよまとまくまく付よあに
しひくわらう

遷子内親王

さちじそそひ事されまくまくしももあ
信解不因流詔因年余年とよ

まつとらう

神祇仰祭仲

わくわくあれまく方をまくももまく

即此成佛とい事ともう

まつとくす

あ身の邊てひまき事つともしほえあ
金利謹のあてよ即成佛道乃
きとくにまきわらもくじもう

圓白布衣夏衣

まくと絶たと聲らん我んとももまくすれ

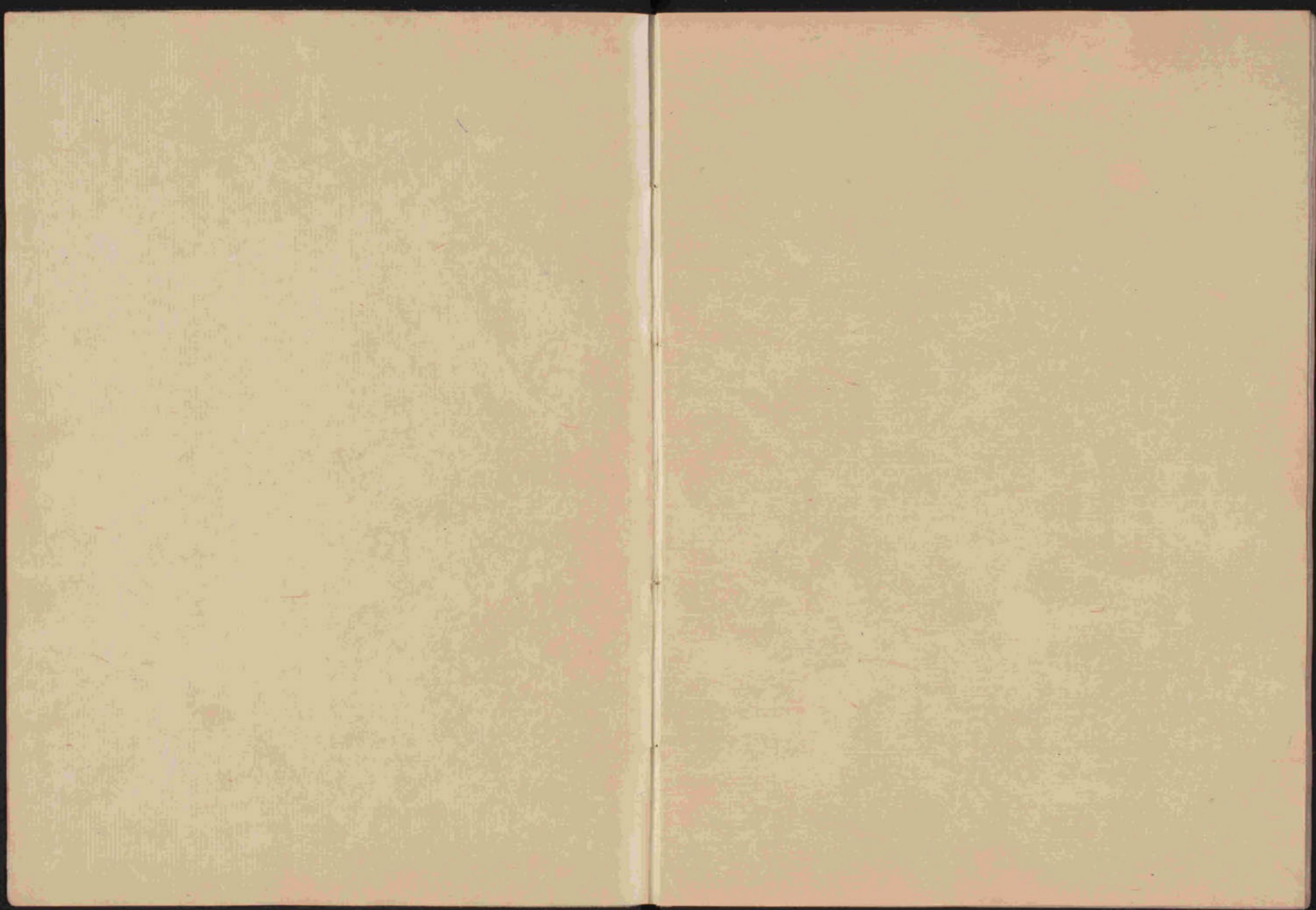
大東寺文院

ひそひそ乞月とあにして圓満山と呼

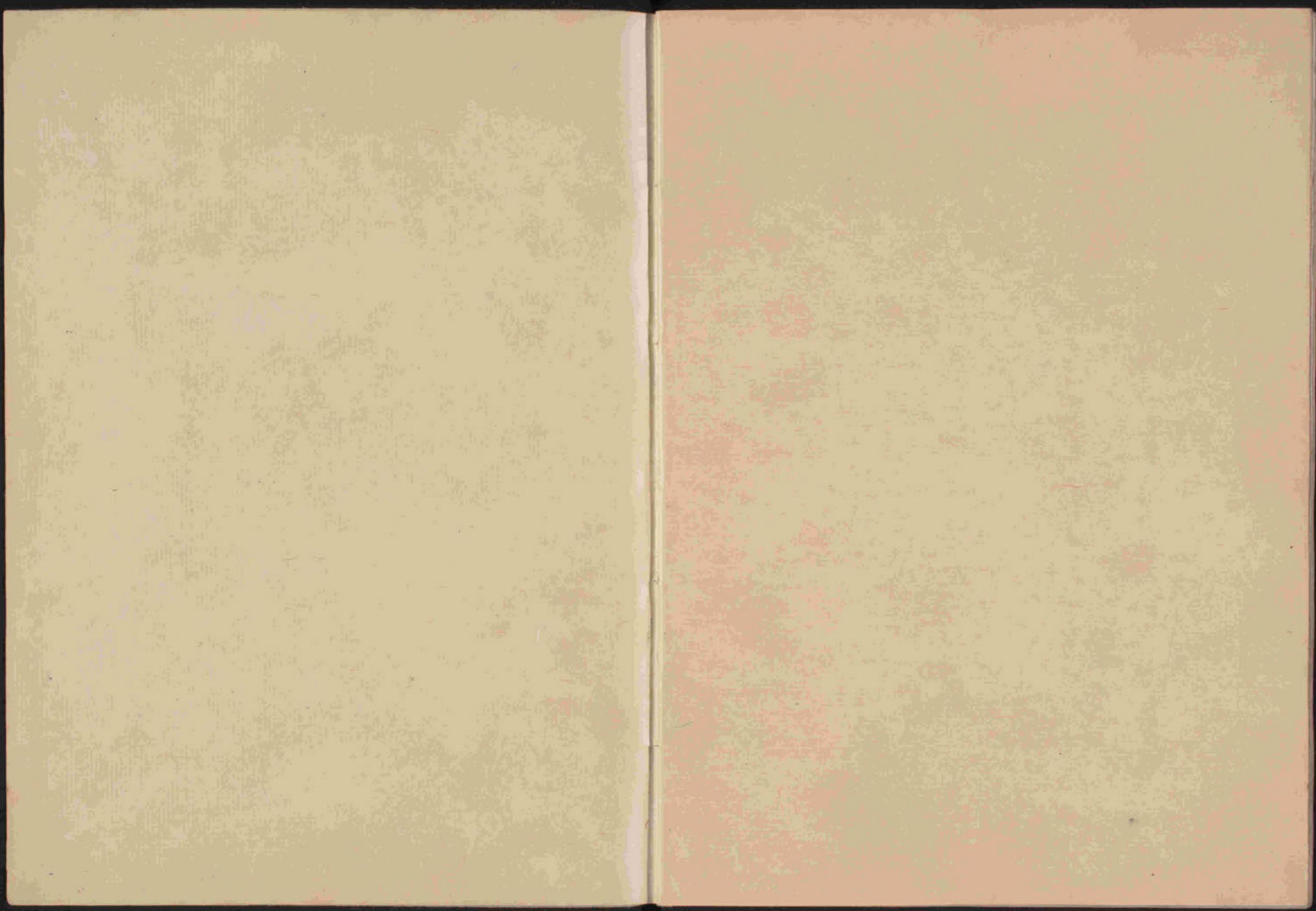
常立靈巖鷲山のふとすう

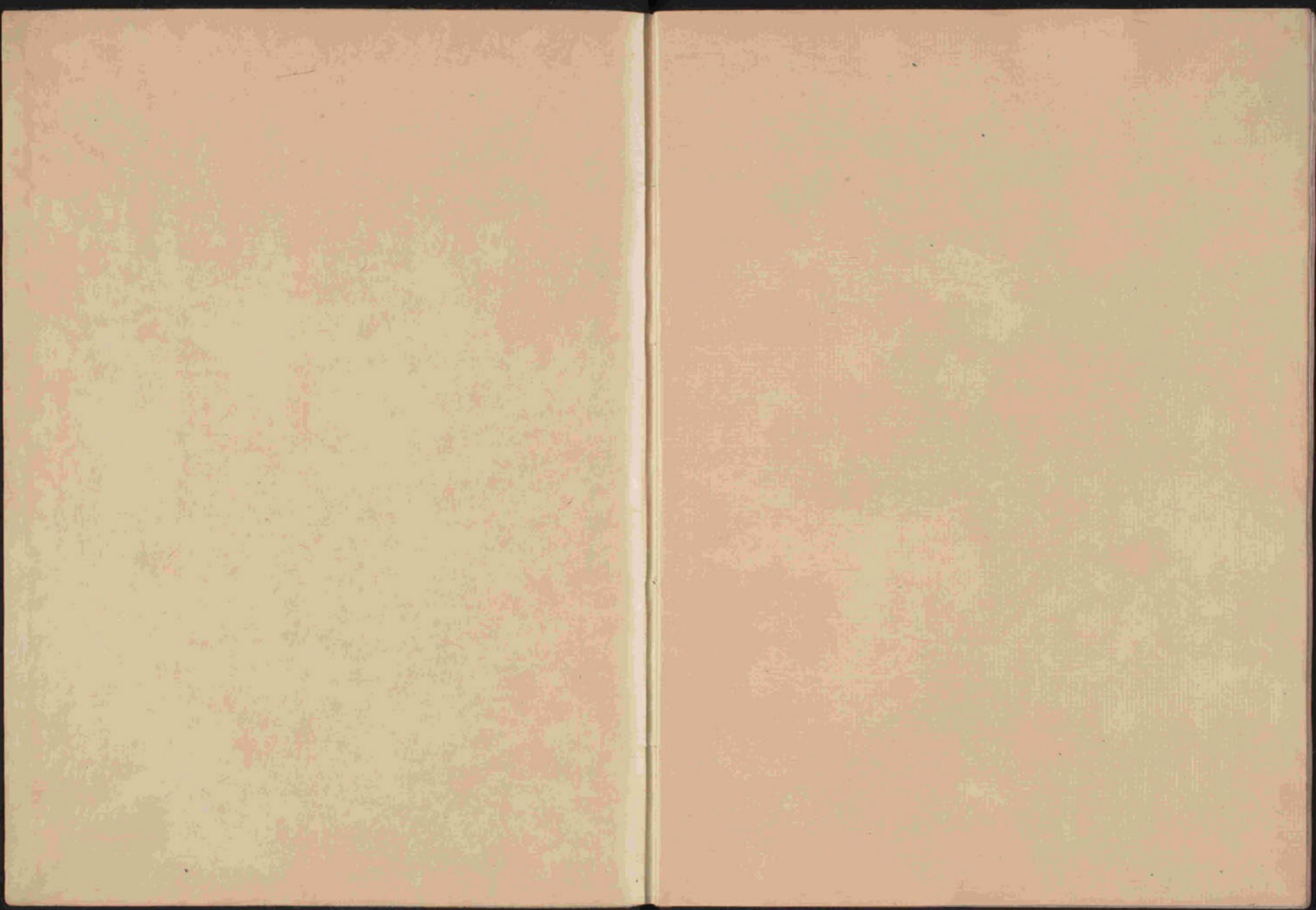
登蓮法師

上座のひのうをまくわらわらむと風









132X
104
16